

## 1 出土の経緯

南あわじ市八木養宜地区で計画されている圃場整備事業に伴い、平成28年度から2ヶ年計画で南あわじ市教育委員会が遺跡範囲確認調査を行っている。平成28年度に2×2mの調査区150ヵ所を調査した結果、八木入田に位置する入田稲荷前遺跡から昨年12月に弥生時代に流入したと考えられる貨泉が3枚重なって出土した。

## 2 入田稲荷前遺跡の概要

南あわじ市八木入田に所在し、淡路島最大の平野である三原平野北東端、養宜川右岸の狭い河岸段丘面に広がる長さ約1km、幅200mの縄文時代前期～鎌倉時代の遺跡である。中心となる時代は弥生時代中期～終末期と奈良～平安時代初頭である。弥生時代の遺構は遺跡の南半部に多く見られ、竪穴住居なども確認した。

## 3 入田稲荷前遺跡の貨泉

遺跡の北部、河岸段丘面崖下に位置する調査区を機械掘削中、耕作土から－65cmの地点で3点が重なった状態で出土した。出土した層には奈良～鎌倉時代の遺物が含まれて、下層には鎌倉時代の遺構も確認された。大きさは径2.32cm・2.27cm・2.31cm、重量2.53g・1.45g・2.47gである。

## 4 貨泉とは

貨泉は中国の新（A.D. 8～23年）の王莽によって鑄造された貨幣で、別名王莽銭とも呼ばれている。A.D. 14年（もしくはA.D. 20年）～40年の間に鑄造され、日本の弥生時代の遺跡から出土する例がある。鑄造年代が短期間であることから、年代決定の重要な指標とされるが、弥生時代後期初頭～前半の遺構・土器に伴うものは少なく、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に伴うことが多い。これは初鑄時には径一寸（2.35cm）、重量五銖（3.19g）と規格が定められていたが、貨泉が新以後の後漢の時代にも私鑄（民間で鑄造）されたため、径が小さく重量の軽いものは後漢の時代に流入した可能性が高い。貨泉の用途は、いわゆる貨幣としての取り扱いではなく、交易品・威信財・国産青銅器の材料など様々な説があり、明確ではない。また、貨泉は中世に大量輸入された中国銭の中に僅かに混入している場合もあり、中世の遺跡や大量備蓄銭の中から発見されることもある。

| 中国 | 秦       | 前漢  | 新        | 後漢 | 三国時代 | 西晋  | 東晋五胡十六国 | 南北朝 |
|----|---------|-----|----------|----|------|-----|---------|-----|
|    | B.C 221 | 202 | A.D 8～23 | 25 | 220  | 265 | 304     | 439 |
| 日本 | 弥生時代    |     |          |    |      |     | 古墳時代    |     |

日本・中国年表

## 5 貨泉の出土分布状況

管見の限りでは、時代を限定しなければ、北は北海道から南は沖縄県まで、全国で180点近く確認されている。その中で弥生時代～古墳時代前期のものは、東は山梨県、南は鹿児島県で35遺跡91点を数える。分布の中心は福岡県と長崎県にあり、一度に複

数枚出土することは少ない。現段階で一括出土しているのは岡山県高塚遺跡25点の出土が最大で、その次は福岡県元岡・桑原遺跡群8点、次に入田稻荷前遺跡と大阪府亀井遺跡・長崎県原の辻遺跡の3点出土が続く。出土遺構や発見場所としては、溝や竪穴住居・土器溜から出土することもあるが、圧倒的に包含層が多く、墓に副葬されることは少ない。また、大規模な拠点集落からの出土より、海を活動の拠点とする比較的沿岸部の集落から出土する傾向にある。

## 6 兵庫県内の出土貨泉

兵庫県では7遺跡10点を数えるが、弥生時代に限定すると、入田稻荷前遺跡と姫路市鍛冶屋遺跡包含層出土の2遺跡となる。また、市内では阿万東町所在の北田遺跡<sup>きたんだ</sup>で中世の柱穴から1点出土している。

## 7 出土の意義

- ① たいへん希少である貨泉が3点重なった状態で出土した全国的にも珍しい例で、弥生時代に渡来したと考えられる貨泉出土遺跡の中で、3番目に多く一括で出土した遺跡（総数は多いが出土地点が異なる遺跡を除く）となる。出土した貨泉は径や重量から新代に鑄造されたものではなく、後漢初頭に鑄造されたものと思われる。弥生時代の遺構や包含層からの出土ではなかったが、中世の大量備蓄銭に混入する貨泉は出土量の0.01%にも満たないため、偶然に3枚が重なっていることは不自然であり、周辺に存在する弥生時代後期の遺構から流れ込んだものと考えられる。
- ② 入田稻荷前遺跡では讃岐・阿波地方などからの搬入土器が出土し、他地域との交流がうかがえる。やや内陸に位置するが、周辺には拠点集落である※幡多遺跡も存在することから、交易が盛んであった地域であったと考えられる。貨泉の流入ルートとして、吉備や四国地方からの経由も推測される。  
※幡多遺跡：入田稻荷前遺跡700m西に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓群や大阪湾型銅戈、終末期の竪穴住居などが確認されている。
- ③ 淡路島は弥生時代の青銅器が多く出土する地域であり、平成27年4月に発見された松帆銅鐸7点は記憶に新しい。銅鐸や銅剣より時期は下がるが、淡路島北部に位置する弥生時代最大級の鉄器工房である五斗長垣内遺跡や中国鏡片が出土した舟木遺跡とは同時期にあたる。貨泉は渡来人との交易もうかがわせることから、弥生時代の流通を考える上で重要であり、畿内への玄関口となる淡路島の重要性を後押しする遺物といえる。

## 8 今後の予定

- ① 今年度は残りの確認調査105ヵ所を行う予定である。来年度から事業施工によって遺跡に影響が及ぶ範囲について本発掘調査を行っていく。
- ② 出土した貨泉については、5月20日（土）～7月2日（日）まで、南あわじ市滝川記念美術館玉青館にて一般公開（有料）を行う。

## 南あわじ市出土の中国銭貨「貨泉」の出土に関するコメント

関西大学大学院非常勤講師（考古学）

森岡秀人

○南あわじ市入田稲荷前遺跡の圃場整備事業に伴う本発掘調査に先立つ確認調査で、包含層中とは言え、中国新王朝期（王莽代）を生産上限とする中国銭貨「貨泉」が三枚もまとまって出土したことに大変驚いている。弥生時代年代研究の一つに中国の貨幣である五銖銭・半両銭・貨泉や中国鏡などを援用し、1980年代中頃に近畿地方を要とする西日本の弥生時代実年代観の枠組みを定立させてきた私の立場や研究動向から言えば、その意義は大変大きいと評価している。

○この遺跡の調査は確認調査レベルであるため、全貌については言及できないが、近辺には有力な弥生遺跡も存在しており、貨泉が単独種で、かつ類似したタイプのものが三枚狭い場所（2m四方の確認試掘坑）から一括で検出されたことは、弥生時代後期との因果関係を十分考えてよい資料だと思う。出土状態を尊重すれば、緡銭的な扱いにも見てとれる点に関心と呼ぶ。偶発的な集合ではなく、集中的に入ってきた資料と考えられる点が重要だ。

○通常貨泉は、単品出土が大半で、中世の銭貨と混在して確認される場合もあり、後世の北宋銭などとともに穴あき一文銭的な流通ルートにも乗ることがあるので、これまでの出土例もことあるたびに丁寧に見てきたが、2枚が重なった検出状態を示し、さらにその遊離資料が近接距離で1枚確認されているので、遺物包含層例としても、その資料のもつ純化度や近隣の弥生遺跡の時期などを検討して考えるべき青銅器資料と判断した。中世の流通銭や大量埋蔵銭とは区別すべき資料と言える。

○この貨泉自体は鑄造開始年代（紀元14年ないしは、紀元20年）の上限部分に特定できる資料ではなく、その特徴（型式・径・厚さ・重量など）から、後漢紀元40年までの間で年代が下降する資料と思われるが、従来例と比べて不自然なものではなく、近接の弥生遺跡出土土器（後期中頃～後半）とも逆によく整合する。この土器の示す年代に対応させることを積極的に考えることも不可能ではない。当該試掘坑周辺での本発掘調査で関連資料が増加する蓋然性は低くはなく、さらなる追加資料も期待できる。ちなみに、これらの土器は後漢併行期に収まる紀元1世紀末～2世紀前半頃の年代を示しており、貨泉流入時期の一つのピークを考えてきた時期とも一致する。銅鐸を使わなくなった淡路島の弥生社会が次の活性期に入る時期であり、3点の貨泉が確認された意義は大きい。

○北部九州を中心に先行して列島流入の実態のある五銖銭・半両銭に比し、少し遅れる貨泉は最も東伝力があり、弥生時代後期の内に岡山平野（高塚遺跡）や大阪平野（亀井遺跡・瓜破遺跡・巨摩廃寺遺跡）、一部は伊勢湾沿岸に到達している。古墳時代前期以降には山梨県など東日本にも達し、日本海側でも港津的機能を有し、大陸・半島系の金属器などが入ってきてやすい鳥取県青谷上寺地遺跡などからも、弥生時代後期に位置づけられる実例が確認さ

れている。山陰や山陽地方では限られた地点から3～4点や25点などまとまった出土数の確認があるが、近畿地方で限られた地点のしかも狭小面積の発掘現場（試掘作業）から3点も出土したことは注目されてよい。中河内などの弥生文化の一大拠点に匹敵する大陸系文物への求心力が淡路南部にもあったということだろう。重なるような出土状態が確認されたのは近畿で初めてのことだ。

○貨泉をはじめ、弥生時代に流入する中国銭貨の性格を海浜部からの出土例が多いことも踏まえて寄港地などの流通貨幣とみる解釈もまま存在するが、物品貨幣段階と考える弥生社会に貨泉が実用の貨幣として使用されたとは考え難い。交易の拠点ともなる単位地域の窓口に一定量もたらされた小形青銅器の一つであり、高い交換価値を有したものではない。それは、河川や溝、包含層、竪穴住居などに一見廃棄した状態で出土する破鏡や鏡片などとよく似た出土事情が素直に物語っている。ただし、稀少価値を否定しているのではなく、中国大陆に比べれば、流入中国銭貨はほんの一握りのものであり、遺跡によってはペンダントに用いるような威信財的機能を保持する。また、銅鐸など青銅器の原料として活用されたことを説く見解もみられるが、日本列島における出土数は非常に少なく、鋳型などが出土する生産場所との繋がりを欠き、現実味がない。

○淡路島西海岸の松帆銅鐸について、2年前の発見当初より近畿最古となる紀元前の最初期埋納を推定し、先駆的な弥生の島人の動きを考えてきたが、淡路市舟木遺跡における中国鏡片の確認など、弥生時代後期には銅鐸や銅剣以外の青銅器も淡路島には早期に伝来している公算が高くなっていた。淡路島全体が青銅器・鉄器など弥生時代の金属器文化に鋭敏な触手を動かす場となっていたことを明証するもので、このたび3枚も一括確認された本遺跡の場合も、近畿中央部とさほど変わらぬ中国銭貨の早期伝播例を加えるものとなった。瀬戸内海東端の海民的な活動が残した証拠が島の内陸部にも存在したと言え、その点も重要である。

○総じて、貨泉を出した入田稻荷前遺跡の本体は、島北部の舟木遺跡と並ぶ拠点的機能を發揮した大規模な遺跡として眠っているのではないか。今後に予定されている本格調査でさらなる青銅器の発見や遺構・遺物の質量の実態が大変注目されるものとなった。当然のことながら、向後も続けて注意を払っていきたい。

【参考文献】森岡秀人「貨幣」『東アジアと日本の考古学 III』交流と交易 同成社 2003 年

## 入田稻荷前遺跡出土の「貨泉」に関するコメント

西南学院大学名誉教授 高倉 洋彰

このたびの南あわじ市入田稻荷前遺跡からの貨泉の出土について、若干の感想を申し上げます。

中国の新～後漢代に鑄造された錢貨である貨泉は、①同時代である弥生時代後期を中心とする時期と、②古代末中世の、2つの時期に日本で出土する。①は新～後漢から日本に流入する文化・文物の一環として伝来するが、錢貨として流通するわけではない。②は備蓄錢として出土するが、錢貨として流通していたことが前提にある。

なお、①でも②でも、錢貨は1枚単位で流通したが、錢の中央にある孔に紐を通して100枚前後をつなぎ緡（さし）錢として使用することもあった。最近見ないが、映画やテレビで、錢形平次が腰に差した錢の束から1枚を摘みだし犯人に投げつける場面があった。あれが緡錢である。

困ったことに、入田稻荷前遺跡は①と②の両時期がみられ、この地で貨泉が使用された時期を遺構からは決定できないことがある。したがって状況から判断することになる。

王莽の貨泉は、前漢の五銖錢、後漢の五銖錢と同じく、直径1寸、重さ五銖と定められていた。当時の度量衡からいうと、直径2.31cm±、重さ3.17g±ということになる。出土した3枚の直径は2.31cm前後をはかる。この点はよいが、完形であるにもかかわらず重さが1.45g、2.47g、2.53gと軽い。これは100枚を紐でつなぎ一連とする緡錢の場合、後漢の靈帝が95枚をもって100文とみなすとしたように、重さを重視しない傾向を反映している。したがって、王莽代の貨泉ではなく後漢も降ったころ、弥生時代後期後半に併行する時期のものであろう。

注目できるのは、今回の出土貨泉が3枚重なっていたということで、これは貨泉のみの単純錢貨として存在したこと、あるいは緡錢の痕跡を留めている可能性を考えることもできる。岡山市高塚遺跡で緡錢の形態を留めたままに検出されているから、希少性を考えればわずか3枚であっても、無理な推論ではない。したがって①の可能性、ことに弥生時代後期後半に由来する貨泉である可能性は高い。

②の可能性を考えておこう。地中の穴蔵や甕に収められた備蓄錢として出土する例が知られていて、かつて調べた際は、中国では陝西省銅川市の19,639枚のなかに貨泉が14枚収められていたものがもっとも多く、平均して10,000枚に1枚程度を貨泉が占めている。日本では3つの甕に374,436枚もの備蓄錢を埋蔵していた北海道函館市の志海苔古錢が有名だが、貨泉は6枚に過ぎない。つまり②の場合、緡錢のなかに貨泉が混ざることであっても、貨泉が3枚揃う偶然は考えられない。

① ②から、入田稻荷前遺跡出土の貨泉は弥生時代後期後半に属すると判断できる。

弥生時代後期後半の時期に、後漢後期に鑄造された貨泉が淡路島で出土することの意味を考える必要がある。貨泉は錢貨であるが、本来の錢貨としての使用が考えられない以上、青銅器の一種として考える必要がある。その場合、銅鐸や武器形青銅器、銅鏡などに比較して小さい。これらの青銅器の原材料として輸入されたという考えもあるが、銅鐸1個を鑄造するのに必要な枚数を考えればそれは無理であろう。唯一使用例が推測できるのは、長崎県対馬市シゲノダン遺跡出土例で、銅剣の鞘尻金具の内部から検出されている。馬鐸が伴出していることを考慮すれば、馬鐸の舌的な、音響具としての使用であろう。しかしその他の例は用途を明らかにしてくれない。

これは貨泉それのみで意味があったということであろう。銅鏡は中国鏡・中国鏡破片（破鏡）・小形仿製鏡として出土・分布する。このうちの破鏡には孔を開け首飾りにしたと考えられる例や、貨泉よりも小さなものがある。貨泉には中央に方孔がある。つまり首飾りに適した形態をしている。

もし首飾りであればその習俗は西から伝えられる。そうでなくとも貨泉は西から伝わってくる。

中国や韓国に由来する文化・文物は九州の北端で受容され、意味付けされて東へと伝えられていく。その道は、1つは九州の武器形青銅器と近畿的銅鐸が一括して大量に検出された島根県荒神谷遺跡に象徴される日本海ルートであり、1つは瀬戸内海ルートである。瀬戸内海ルートを考える際には、どちらかというところ広島・岡山など瀬戸内海の北を通るルートが考えられている。しかし、四国西端部には中広銅矛・広形銅矛が大量に出土しているし、東部でも善通寺市キツチョ塚遺跡、同彼ノ原遺跡、高松市居石遺跡、さらに南あわじ市（旧西淡町）鉦田遺跡のように小形仿製鏡も出土している。これらの時期は貨泉と重なる。

淡路島の北部では舟木遺跡で中国鏡片、南部では貨泉や鉦田遺跡で小形仿製鏡が出土したことは九州と近畿を結ぶルートとして四国を経由するルートを考えさせる。今回の入田稲荷前遺跡や松帆銅鐸などの南あわじ市の成果は、日本海ルートにおける荒神谷遺跡の役割を、地域として果たしているとみられるからである。

今後、淡路島からの続報に期待している。

## 南あわじ市入田稻荷前遺跡出土の貨泉について

奈良文化財研究所客員研究員 難波洋三

西日本の弥生時代の集落からは、稀にはあるが、半両銭、五銖銭、貨泉、貨布、大泉五十といった、中国の同時代の銅銭が出土する。その中でも特に出土例が多いのが、貨泉である。

前漢王朝を篡奪し、新たな王朝の新を建てた王莽（おうもう）は、独自の理念に基づいて幣制改革を繰り返したが、そのため経済混乱が起き、これが新を短命に終わらせる一因となった。貨泉は、A.D.14年あるいはA.D.20年の、王莽の第4次幣制改革で新たに作られるようになった銅銭で、A.D.23年に新が滅んだ後も、後漢王朝を建てた光武帝がA.D.40年に五銖銭の鑄造を再開するまで、鑄造と使用が続いたようである。

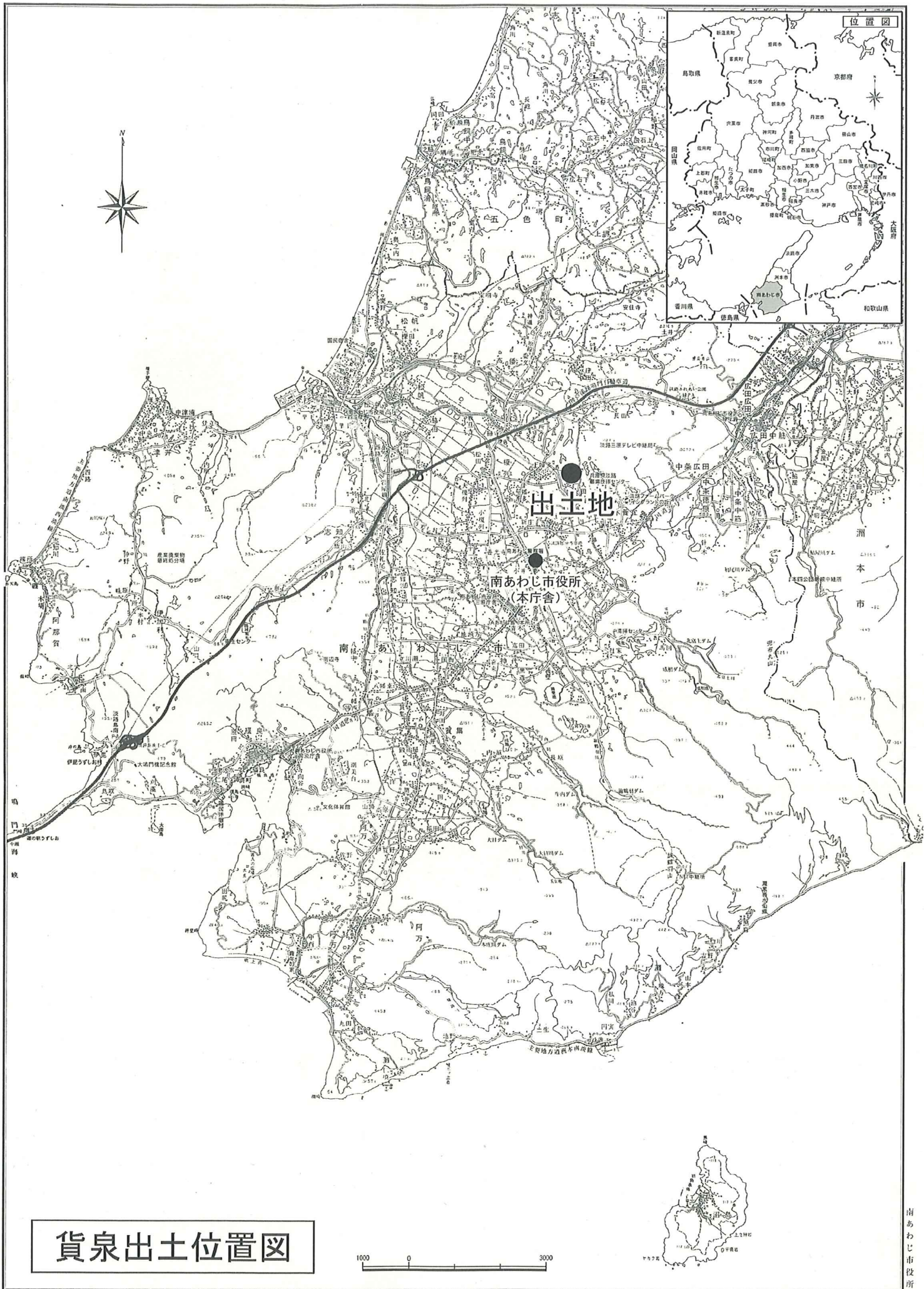
貨泉は総体に精巧な作りで、青銅の質が良く重量の充分あるものは備蓄対象として退蔵され伝世することがあった。そのため、日本の中世の出土銭にも、伝世した貨泉が少数含まれている。入田稻荷前遺跡の貨泉は、古代・中世の遺物も含む包含層から出土したので、中世まで伝世したものである可能性がないわけではないが、貨泉のみがより新しい時期の銅銭を伴うことなく3枚まとまって出土していることを考えれば、鑄造から間もない弥生時代後期にこの地にもたらされたものと考えてよいであろう。

本例のように貨泉が複数枚出土する弥生時代後期の遺跡の多くは沿岸部に分布しており、これらの集落は海洋交易にも従事する海辺の村、いわゆる「海村」で、そのような海洋交易を通じて中国の銭貨も入手したと考えられている。また、貨泉を含む銅貨の多くが墳墓に副葬されることなく日常生活域から出土することを重視し、これが交易の対価として使用されたと考える説があることは注目される。

南あわじ市付近は、瀬戸内海の北部九州と近畿以東をつなぐ東西の交通路と四国と播磨・摂津をつなぐ南北の交通路の交差する地であり、かつ、慶野の砂嘴の内側には良港となる潟湖が広がっており、海上交易上、重要な地域であったと考えられる。入田稻荷前遺跡は潟湖の奥のやや内陸に位置するが、この遺跡で出土した貨泉3枚は、この地域が弥生時代後期に海上交易の要衝の地として繁栄していたことをうかがわせる貴重な資料である。

南あわじ市の松帆周辺では、慶野中ノ御堂の銅鐸8個（1686年）と1個（江戸末）、古津路の銅剣14本（1966年）、松帆の銅鐸7個（2015年）と、弥生時代中期に作られた青銅製祭器が多数出土している。松帆付近にこのように青銅製祭器が多数埋納された原因については諸説あるが、私は弥生時代中期に遡ってこの地が海上交易の要衝であったことが関係していると考えている。入田稻荷前遺跡で出土した貨泉は青銅製祭器よりも遅れて弥生時代後期にもたらされたと考えられるが、この説に有利な資料とできよう。遺跡の全容と貨泉出土地点が遺跡内のどのような場所に当たるのかの解明、入田稻荷前遺跡と当時の潟湖や河川との関係をはじめとする古環境の復原などが、今後の重要な検討課題となるであろう。

近年、同じ淡路島の北部の淡路市では、五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡や舟木遺跡といった、畿内では未発見の、弥生時代後期の大規模な鉄器生産遺跡が発見され、注目を浴びているが、今回の発見で、淡路島北部のみならず南部についても、今後、弥生時代後期の注目すべき遺跡の発見が期待できるようになった。また、この地域の弥生時代の集落の調査が進めば、松帆銅鐸などの多量の青銅製祭器を集めて埋納する潜在力をこの地域がなぜ有していたのかなどの解明も進むと期待できる。



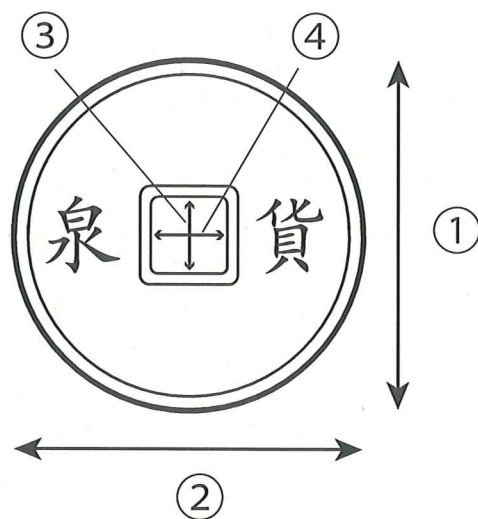
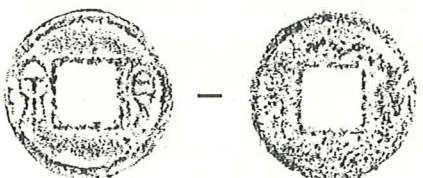
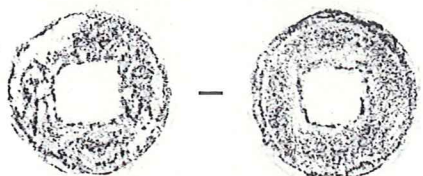
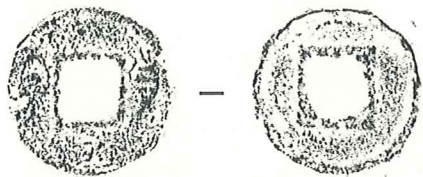
# 貨泉出土位置図

この図は、出土品の見本を示すために、地図上の位置を正確に示すために作成されたものである。 (作成者: 平田孝幸、第2版)

地図: 国土地理院編、1:25,000、昭和50年版、国土地理院発行

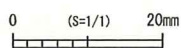
南あわじ市役所





⑤ 厚み

⑥ 重量



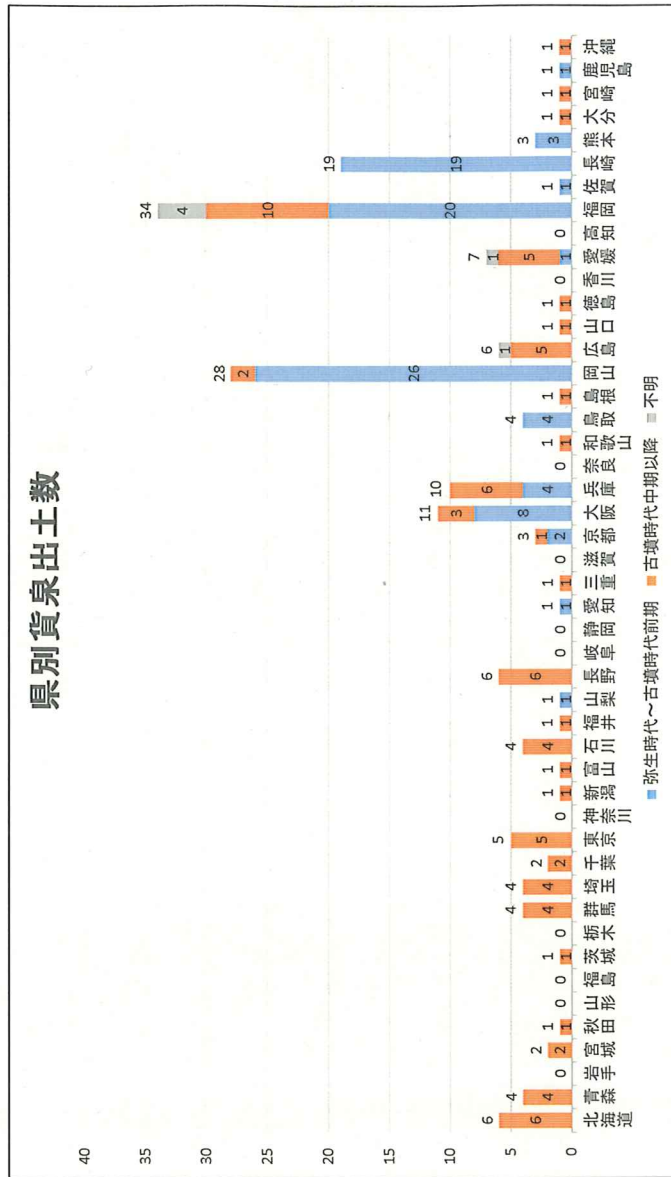
入田稻荷前遺跡出土貨泉計測表

|            | 1       | 2       | 3       |
|------------|---------|---------|---------|
| ① 外径縦 (cm) | 2.318cm | 2.276cm | 2.328cm |
| ② 外径横 (cm) | 2.300cm | 2.280cm | 2.285cm |
| ③ 内径縦 (cm) | 0.704cm | 0.739cm | 0.716cm |
| ④ 内径横 (cm) | 0.746cm | 0.798cm | 0.708cm |
| ⑤ 厚み (cm)  | 0.130cm | 0.099cm | 0.132cm |
| ⑥ 重量 (g)   | 2.47g   | 1.45g   | 2.53g   |

県別貨泉出土数一覧

|     | 弥生時代～古墳時代前期 | 古墳時代中期以降 | 不明 | 合計  |
|-----|-------------|----------|----|-----|
| 北海道 | 0           | 6        | 0  | 6   |
| 青森  | 0           | 4        | 0  | 4   |
| 岩手  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 宮城  | 0           | 2        | 0  | 2   |
| 秋田  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 山形  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 福島  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 茨城  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 栃木  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 群馬  | 0           | 4        | 0  | 4   |
| 埼玉  | 0           | 4        | 0  | 4   |
| 千葉  | 0           | 2        | 0  | 2   |
| 東京  | 0           | 5        | 0  | 5   |
| 神奈川 | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 新潟  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 富山  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 石川  | 0           | 4        | 0  | 4   |
| 福井  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 山梨  | 1           | 0        | 0  | 1   |
| 長野  | 0           | 6        | 0  | 6   |
| 岐阜  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 静岡  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 愛知  | 1           | 0        | 0  | 1   |
| 三重  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 滋賀  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 京都  | 2           | 1        | 0  | 3   |
| 大阪  | 8           | 3        | 0  | 11  |
| 兵庫  | 4           | 6        | 0  | 10  |
| 奈良  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 和歌山 | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 鳥取  | 4           | 0        | 0  | 4   |
| 島根  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 岡山  | 26          | 2        | 0  | 28  |
| 広島  | 0           | 5        | 1  | 6   |
| 山口  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 徳島  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 香川  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 愛媛  | 1           | 5        | 1  | 7   |
| 高知  | 0           | 0        | 0  | 0   |
| 福岡  | 20          | 10       | 4  | 34  |
| 佐賀  | 1           | 0        | 0  | 1   |
| 長崎  | 19          | 0        | 0  | 19  |
| 熊本  | 3           | 0        | 0  | 3   |
| 大分  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 宮崎  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 鹿児島 | 1           | 0        | 0  | 1   |
| 沖縄  | 0           | 1        | 0  | 1   |
| 合計  | 91          | 82       | 6  | 179 |

県別貨泉出土数



兵庫県内貨泉出土地一覧

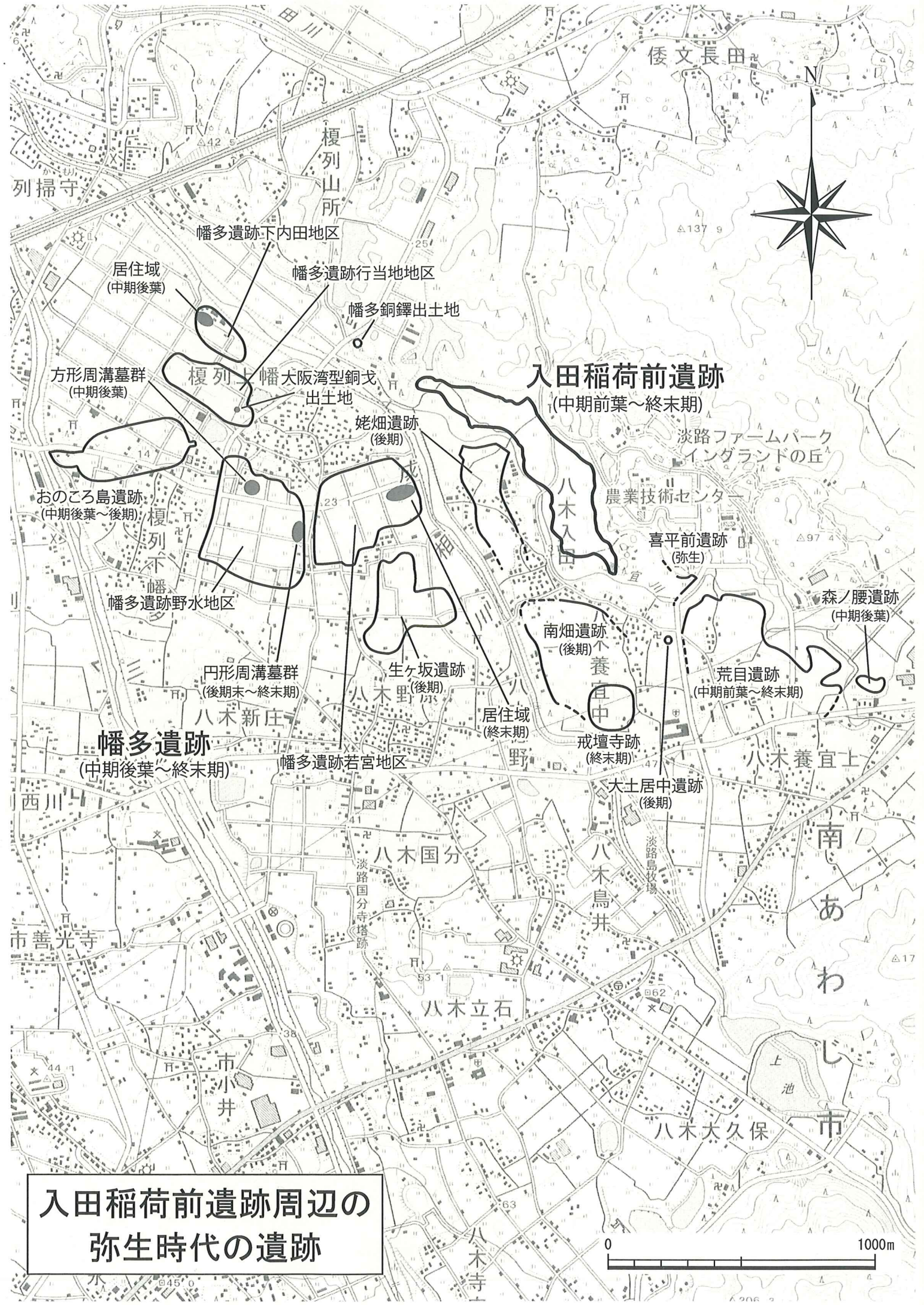
| 出土地        | 数量 | 所在地        | 出土状況       | 時代                 |
|------------|----|------------|------------|--------------------|
| 1 入田稲荷前遺跡  | 3  | 南あわじ市八木入田  | 包含層採集      | 古代～中世(弥生遺構からの流れ込み) |
| 2 北田遺跡     | 1  | 南あわじ市阿万東町  | 柱穴         | 中世                 |
| 3 大崩遺跡     | 1  | 洲本市五色町下塚   | 備蓋銭        | 中世                 |
| 4 兵庫津遺跡53次 | 1  | 神戸市        | 包含層採集      | 中世                 |
| 5 東山12号墳   | 1  | 多可郡多可町中区東山 | 古墳石室内      | 中世(北宋銭5枚と同層から出土)   |
| 6 塩野       | 2  | 姫路市安富町     | 備蓋銭(備前焼大甕) | 中世                 |
| 7 鍛冶屋(芝原)  | 1  | 姫路市豊次町     | 包含層採集      | 弥生時代中期前半～後期        |

弥生時代に貨泉が流入したと考えられる遺跡



福岡県拡大図





倭文長田

N

列掃守

榎列山所

幡多遺跡下内田地区

居住域  
(中期後葉)

幡多遺跡行当地地区

幡多銅鐸出土地

方形周溝墓群  
(中期後葉)

榎列上幡大阪湾型銅戈  
出土地

入田稲荷前遺跡  
(中期前葉～終末期)

淡路ファームパーク  
イングランドの丘

農業技術センター

おのころ島遺跡  
(中期後葉～後期)

榎列下幡

幡多遺跡野水地区

姥畑遺跡  
(後期)

喜平前遺跡  
(弥生)

森ノ腰遺跡  
(中期後葉)

円形周溝墓群  
(後期末～終末期)

生ヶ坂遺跡  
(後期)

南畑遺跡  
(後期)

荒目遺跡  
(中期前葉～終末期)

幡多遺跡  
(中期後葉～終末期)

幡多遺跡若宮地区

居住域  
(終末期)

戒壇寺跡  
(終末期)

八木養宜上

西川

八木国分

大土居中遺跡  
(後期)

南

市善光寺

淡路国分寺塔跡

八木鳥井

あわ

八木立石

市小井

八木大久保

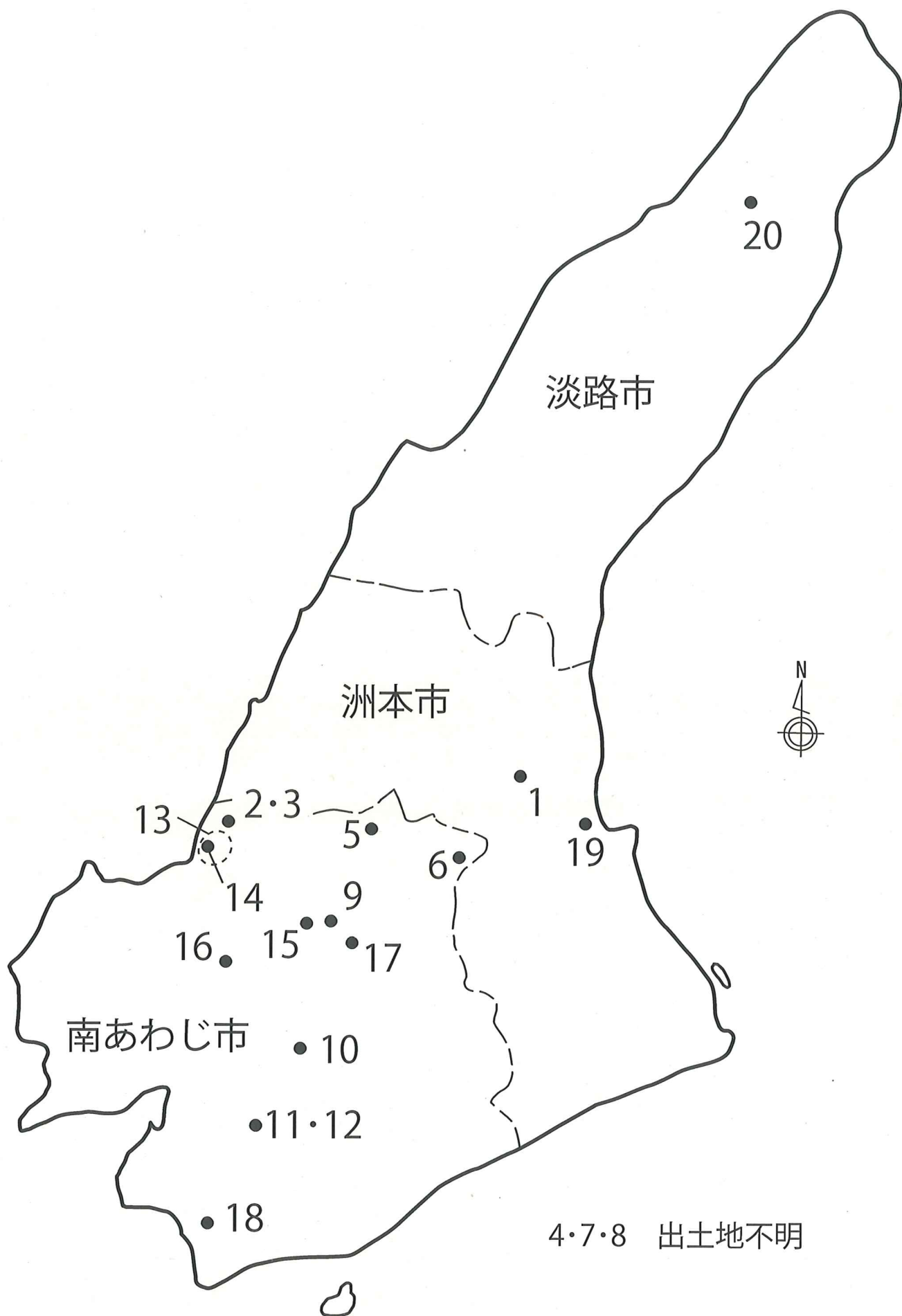
市

入田稲荷前遺跡周辺の  
弥生時代の遺跡



淡路島の弥生時代青銅器出土一覧表

| No. | 名 称                 | 型 式             | 文 様           | 大 き さ                         | 出 土 地             | 出 土 年                          | 出 土 状 況                     | 所 有 ・ 管 理 者          | 備 考                            |
|-----|---------------------|-----------------|---------------|-------------------------------|-------------------|--------------------------------|-----------------------------|----------------------|--------------------------------|
| 1   | 中川原銅鐸               | 菱環鈕1式           | 横帯文           | 24.2cm                        | 洲本市中川原<br>二ツ石     | 元禄年間<br>(1688~1703)            | 二ツ石村の池底から出土                 | 南あわじ市<br>隆泉寺         | 国指定重要文化財<br>『淡路草』は後に打ち破き捨てると記載 |
| 2   | 慶野中の御堂銅鐸            | 外縁付鈕1式          | 4区袈裟襷文        | 22.5cm                        | 南あわじ市<br>松帆慶野中の御堂 | 1686(貞享3)・元文年間?<br>(1736~1741) | 大水により出土                     | 南あわじ市<br>日光寺         | 国指定重要文化財<br>『宝鐸御屈写』記載<br>舌を伴う  |
| 3   | 慶野銅鐸                | 外縁付鈕1式          | 4区袈裟襷文        | 33cm                          | 南あわじ市<br>松帆慶野北原   | 江戸末~<br>明治初                    | 中の御堂を開墾中に出土                 | 南あわじ市<br>慶野組・淡路文化史料館 | 国指定重要文化財                       |
| 4   | 伝淡路国出土銅鐸            | 外縁付鈕2式          | 2区流水文         | 46.0cm                        | 不明                | 不明                             | 不明                          | 尼崎市本興寺               | 島根県加茂岩倉15号銅鐸と同範                |
| 5   | 倭文銅鐸                | 外縁付鈕2式          | 2区流水文         | 44.5cm                        | 南あわじ市<br>倭文庄田笹尾   | 1959                           | 牧草地として開墾中出土                 | 東京国立博物館              | 八尾市恩智垣内山・伝大和国・津市神戸木ノ根銅鐸と同範     |
| 6   | 中条銅鐸                | 扁平鈕式            | 6区袈裟襷文        | 45cm                          | 南あわじ市<br>広田中筋堂丸   | 1802(享和2)                      | 畑中より掘り出した                   | 所在不明                 | 『淡路草』記載                        |
| 7   | 伝淡路川出土銅鐸            | 扁平紐式            | 6区袈裟襷文        | 46.8cm                        | 洲本市               | 1912                           | 淡路川と洲本川の合流点近くの地底2尺のところより出土  | 辰馬考古資料館              | 淡路川は実存しないため、出土地不明              |
| 8   | 伝淡路国出土銅鐸            | 突線紐1式           | 2区流水文         | 37.3cm<br>鈕欠損                 | 不明                | 不明                             | 不明                          | 辰馬考古資料館              | 前所有者が購入時に淡路出土と言われる             |
| 9   | 幡多銅鐸                | 不明              | 不明            | 不明                            | 南あわじ市<br>榎列上幡多    | 不明                             | 岩淵という淵より掘り出した               | 所在不明                 | 『淡路草』記載                        |
| 10  | 地頭方銅鐸               | 不明              | 不明            | 不明                            | 南あわじ市<br>神代地頭方経所  | 不明                             | 高一尺斗なる壺と仏具花皿宝鐸を掘り出した        | 所在不明                 | 『淡路草』記載                        |
| 11  | 賀集福井銅鐸              | 不明              | 不明            | 不明                            | 南あわじ市<br>賀集福井大日堂  | 不明                             | 覚王谷・坊ヶ谷の名あり。近年宝鐸など掘り出せることあり | 所在不明                 | 『淡路草』記載<br>新田南銅鐸と同一か           |
| 12  | 新田南銅鐸               | 不明              | 不明            | 不明                            | 南あわじ市<br>稲田南      | 宝暦年間<br>(1751~1764)            | 松が池再修の時、掘り出せり。…松が池の山手に覚王谷あり | 所在不明                 | 『淡路草』記載<br>賀集福井銅鐸と同一か          |
| 13  | 松帆1~7号銅鐸            | 菱環鈕2式<br>外縁付鈕1式 | 横帯文<br>4区袈裟襷文 |                               | 南あわじ市<br>松帆地区     | 2015                           | 石材製造販売会社が採取した砂山から発見         | 南あわじ市<br>教育委員会       | 舌を伴う                           |
| 14  | 古津路銅剣               | 細形・中細形          | b類            | 長40.6<br>~45.2<br>cm          | 南あわじ市<br>松帆古津路    | 1966・1969                      | 砂採取中に出土                     | 国立歴史民俗博物館・兵庫県立考古博物館  | 14本                            |
| 15  | 幡多銅戈<br>(幡多遺跡行当地地区) | 大阪湾型銅戈<br>c・d類  |               | 破片数<br>27点                    | 南あわじ市<br>榎列上幡多    | 1998                           | 弥生IV後葉の土器と供伴                | 南あわじ市<br>教育委員会       | これまでのc類よりさらに退化                 |
| 16  | 鉢田遺跡                | 内行花文鏡           |               | 径<br>8.5cm                    | 南あわじ市志知           | 1983                           | 古墳時代中期の溝の肩より出土              | 兵庫県立考古博物館            |                                |
| 17  | 入田稻荷前遺跡             | 貨泉              |               | 径<br>2.3cm                    | 南あわじ市八木入田         | 2016                           | 中世の遺物包含層より3枚重なって出土          | 南あわじ市<br>教育委員会       |                                |
| 18  | 北田遺跡                | 貨泉              |               | 1.8×<br>1.9cm                 | 南あわじ市阿万東町         | 1995                           | 中世の土坑より出土                   | 南あわじ市<br>教育委員会       | 祥符通寶1枚・大観通寶2枚・開元通寶1枚・皇宋通寶1枚と供出 |
| 19  | 宇山牧場1号墳             | 五銖銭             |               | 径<br>2.5cm                    | 洲本市宇山2丁目          | 大正末年                           | 畜産試験場事務所建設中に2枚出土            | 個人蔵                  | 素文鏡と供出                         |
| 20  | 舟木遺跡                | 後漢鏡(鈕)<br>・不明破片 |               | 2.4×<br>1.7cm<br>・1×<br>1.5cm | 淡路市舟木             | 1991・1994                      | 弥生後期の竪穴住居より出土               | 淡路市<br>教育委員会         | 鉄器工房                           |



淡路島の弥生時代青銅器出土位置図